

ナイダ以後の動き、日本における論争も合わせて

前書き

今回は翻訳史上最大の論争である、文質論争について書いてみたい。仏教が漢民族にも伝わり、仏典漢訳の働きが始まってくると、翻訳に際して、文をとるべきか、質をとるべきかという論争が始まった。そして、支謙は質訳という方法を主張し、釈道安は文訳という方法を主張した。これを文質論争というのであるが、我々はその全貌を出三蔵記集という書物の経序の部分から知ることができる。(中嶋(1997)にはその部分の原文と現代日本語訳が収められており、注釈もあり、この論争を知る上で助けとなる。)この論争は150年以上も続いたものであり、また、記録が残っているため、最大の論争といってよいであろう。これは仏典漢訳の初期に起こった論争であり、有名なものでもあるが、これがどのような論争であったか、「文」とは、そして「質」とは何のことか、まだ十分に明らかにされていないのである。そこで、まず現在までのこの論争の解釈の歴史を見てみたい。そしてこの論争がどのようなものであるかを明らかにし、最後に、この論争と、ナイダ以後の翻訳をめぐる動き、また、日本で起こった同様の論争を多少とも比較してみたい。

本論

伝統的な説では、文質論争は直訳か非直訳かという論争と考える。すなわち、質訳とは直訳であり、文訳とは非直訳である。(なお、意識という用語は何を意味するのかははっきりしないところがあるため、わたしは使わないことにしている。)

丘山(1983)は、「文」を「文雅な文体・表現」、「質」を「質実な文体・表現」と解釈する。

丘山(1996)ではもう少し詳しく、「文」を「文雅な文体・文章表現を重んじた文体」、「質」を「質実な文体・内容伝達を重視した文体」となっている。

Martha Cheung(2006)はかなり詳細な文献であるが、文訳を refined translation(洗練された訳)とし、質訳を unhewn translation(粗野な訳)としている。

私の主張は、北村(2008)では直訳、非直訳の論争と解釈したが、北村(2010)ではそれを改め、質訳は意味に基づいた訳、文訳は文学的な訳と解釈した。

ここで、なぜそのような解釈を取るに至ったかを、Cheungの著についての検討も加えつつ、述べてみ

たい。

まず Cheungの説について見てみたいが、Cheungの説くところには以下の3つの問題がある。

1. 文訳を refined translation(洗練された訳)とし、質訳を unhewn translation(粗野な訳)としているが、文、質という漢字の意味からは、多少無理があるように思われる。文訳はこれでもよいかもしいが、質という語に悪い意味をもたせることは(実際、そうしているわけであるが)、この漢字の意味から考えて、不可能である。

2. あいまいなことからについての議論というものは、長期間続きにくい。たとえば、俳句のわび、さびといったことについて長時間議論することはむずかしい。150年も続いた論争であれば、その論点はかなりはっきりしたものであったはずである。

3. 洗練された訳と粗野な訳であれば、洗練された訳の方がよいはずであり、論争にはならないのではないかと思われる。

4. Cheungの解釈では、(あるいは直訳、非直訳という解釈を取った場合でも)、出三蔵記集の中に時々出て来る、「文と質の両立」という表現を訳せなくなる。実際、Cheungの著では、必ずしも訳していない。そのうち2箇所(一つは同異記の中、もう一つは経序7-11)は重要なところであり、北村(2010)では2箇所とも引用したのであるが、おそらく、Cheungは訳せなかったのであろうと思う。(なお、同異記の部分は、中嶋(1997)には含まれていない。)上記2箇所以外では、中嶋(1997)のp.302の「質朴と文飾をそれなりに備え」(日本語訳は中嶋による)というところ(経序10-21)(原文は「令質文有体」)の訳が Cheung(2006)のp.108に出て来るが、ここでは、同時に成立するという点については言及しない訳し方になっている。その部分は Cheungの訳かどうか不明である。なお、Cheung(2006)は複数の著者による著であり、それぞれの著者の間に、多少の見解の相違があった可能性があるといつてよいと思う。

丘山(1996)をもう少し進めて、「質」とは結局のところ意味のことであり、文とは美文(雅文)のことであるとわたしは考える。(このわたしの立場については、「東洋」でも述べたとおりである。)これは「質」、「文」の漢字の意味から自然に出て来る結論であらうと思う。このような単純な解釈をとってこそ、文質論争の全体像が、最もはっ

きりと見えてくるのではないかと思う。翻訳に関する論争であれば、直訳か非直訳かという論争に違いないと考える学者が多く、そのため最初の間違いが生じたのではないかと思う。また、仏典漢訳は口述筆記の方法で行われたのであるが、現在では、そのような翻訳方法をとる者が非常に少なく、そのため、口述筆記翻訳でどのようなものが出来てくるかということについて、認識不足であったものと思われる。

それにしても、21世紀にもなって、Chineseの専門家でないわたしがこのような文章を書いているということは、この方面での研究がよほど遅れているということであろうと思う。

しかし、これがまずはっきりしないと、次の問題、すなわち、この論争がどのように解決したかというところに進めないのである。

ここで、事例に即して述べない限り、議論は現実味を欠き、また、結論も出せないのではないかといわれるかもしれない。しかし、膨大な漢文仏典にあたり、また、サンスクリットの原文とも比較しつつ述べることは、わたしの力に余ることなので、そのようなことを述べた研究をあげるにとどめたい。河野(2006)のp. 292 および、そこで引用されている同著書のその他の箇所には、原文に即した検討がなされていることを述べておきたい。ただし、どのような表現がなされているか、また河野氏の立場も考えに入れなければならず、注意深い取り扱いが必要であろう。これ以外にも、調べていくと、原文に即した研究が少しずつ見つかる。

日本において

文、質という問題は翻訳とは無関係にも起こりうる。(文章の書き方以外にも、類似の問題が起こりうる。たとえば、プレゼントの包装にお金をかけるべきか、結婚式にお金をかけるべきか等々、例はいくらでもあげることができよう。)

斎藤(2002)は、日本における文質論争の例ともいべきものを3つあげている(ただし、文質論争という言い方はしていないが)。これは翻訳という行為に伴うものではなく、文章の書き方の中で出てきたものであるが、興味深いものであるため、ここで紹介しておきたい。

第一に、谷崎潤一郎の「文章読本」以来の、文章の書き方をめぐる論争。谷崎は文体よりも文章の中身を重視したが、その後に出たいろいろな文章作法の本では、これに次々と異を唱え、よい文体ということが強調されている。

第二に、日本の作文教育における芦田恵之助と友納友次郎の論争である。芦田は、内容のある文章を書くことを重視したが、友納は、書く技術の教育を

すべきであると唱えた。以下に少しだけ引用しておきたい。

「争いは教育界を二分する『東西対決』の様相をおび、・・・宮本武蔵と佐々木小次郎の源流島の決戦にさえたえられたという。・・・」(p. 158)

第三に、戦後の綴り方・作文論争がある。これは上記の論争の継続とも言うべきものである。

このように斎藤(2002)は、著者も意識していなかったかと思うが、かなりの部分を文質論争の記述に費やした文献となっている。

意味(内容)に対する関心は人間にとって本質的なものであり、また、文章(外面)の美を求めるのも、人間にとってかなり本質的なことであるに違いない。そのため、「文か質か」という論争や問いかけが繰り返し起こってきたことは、当然のことと考えるべきであろう。また、「文も質も」という要求や努力はこれからも繰り返されるものであろうとわたしは考えている。

(なお、東洋の翻訳論のシリーズには、ここで触れなかったことも書かれているので、お読みいただければ幸いです。また、この原稿は前号の原稿とあわせてお読みいただければ、いっそう良く理解いただけるものと思う。)

付記1

欧米においては、ナイダが、意味に基づいた訳、わかりやすい訳を主張したことはよく知られている。その後、特に聖書翻訳の分野では、Wendland(2004)が出て、芸術性の面で、理論と方法論を書いている。つまり、文学的な訳を作る方法と取り組んでいる。(彼の理論と方法論は、広い範囲での適用が可能である。)この2人は対立関係にあるわけではなく、それぞれが、自らの使命と信じる領域で貢献しているものと思うが、文質論争との関係で見ると、興味深い。Wendlandの著の巻末に翻訳の見本が出てくるが、彼はそこで Good News Bible は取り上げず、ドイツ聖書協会の Gute Nachricht Bibel(1997)等を取り上げていることも、記しておきたい。

付記2

文か質かという問題は、もともと論語の孔子の言葉から始まるものである。これについては、中嶋(1997)p. 61等にもあるとおりである。仏典翻訳の研究者の間ではよく知られていると思うが、参考のため論語の言葉を以下に引用しておく。久米(1973)p. 101により、書き下し文と現代語訳をあげておく。

[書き下し文]

子曰く、質、文に勝てば野。文、質に勝てば史。文質彬彬(ひんぴん)として、然る後に君子。

[現代語訳]

実質の側面が形態の側面を凌駕したものは粗野である。かといって、形態の側面が実質の側面を凌駕すれば空疎である。形態と実質とが過不足なく均衡しあっているものが君子なのだ。(雍也 18)

もちろん、論語において述べられているのは、翻訳における文、質ではないが、この箇所、あるいはここで用いられている用語が、仏典漢訳の時代に改めて登場することになった次第である。

まとめ

以上、翻訳その他における文質論争について、また、文質を両立させたいが、両立させにくいという葛藤について述べてみた次第である。しかし結局のところ、完全な文訳というものは存在せず、また、完全な質訳というものが存在するわけでもない。しかし、翻訳の方向性という面から見れば、ご理解いただけるものと思う。

文質論争が解決したかどうかということについては、歴史を通しての人間の営みは、解決に向かわせるものであるとよいであろう。また、文学性を要求しない翻訳においては、当然ながら、文、質の対立はありえない。

ただ、学術論文などでも、文学性が完全に無視できるということはまれである。時として、論文にも文学的な響きがあり、また、論文中で比喩とか対語等々のレトリックを使わないということはありません。

また、文質論争が翻訳者各人の心の葛藤として、存在し続けることも、認めなければならないであろう。

ここであげたいいろいろな事例を同列に置くことは、もちろんできない。仏典漢訳時代と比べてナイダ以後の意味の取り扱いには相当に細かくなっているし、また、斎藤(2002)の扱っているものは、翻訳とは直接の関係はない。しかし、いろいろな場所で、時代を超えて、人類は文と質という問題と取り組んできたこと、また、解決方法を探ってきたことは見てとれるのではないかと思う。

参考文献

横超慧日「仏教經典の漢訳に関する諸問題」、東洋学術研究通巻 105 号(22 巻 2 号)、東洋哲学研究所、東京、1983 年

丘山新「漢訳仏典と漢字文化圏 翻訳文化論」(シリーズ東アジア第五巻『東アジア社会と仏教文化』春秋社)1996 年

丘山新「漢訳仏典の文体論と翻訳論」、東洋学術研究通巻 105 号(22 巻 2 号)、東洋哲学研究所、東京、

1983 年

河野訓「初期漢訳仏典の研究 竺法護を中心として」伊勢、2006 年

北村彰秀「続 東洋の翻訳論 学者基本典を中心として」ウランバートル、2008 年

北村彰秀「東洋の翻訳論 蔵蒙対訳『学者基本典』を出発点として」ウランバートル、2010 年

久米旺生訳「論語」(中国の思想第 9 巻)第 2 版(1973)

斎藤美奈子「文章読本さん江」筑摩書房(2002)

E. A. ナイダ「翻訳学序説」開文社出版、東京、1972 年

E. A. ナイダ他「翻訳 理論と実際」研究社、東京、1973 年

中嶋隆蔵編「出三蔵記集 序巻訳注」京都、1997.

「国訳一切経 和漢撰述部 31 史伝部一 出三蔵記集」東京、1950(初版)、2000(改訂三版).

水野弘元「經典はいかに伝わったか 成立と流伝の歴史」東京、2004 年

Baker, M.(ed.) :Routledge Encyclopedia of Translation Studies, Oxon 1998.

Martha Cheung (ed.) An Anthology of Chinese Discourse on Translation vol. 1, Manchester, 2006.

Munday, J.: Introducing Translation Studies – Theories and Applications, Oxon 2001.

Ernst R. Wendland: Translating the Literature of Scripture. Dallas, Texas, 2004.

参考サイト

<http://21dzk.l.u-tokyo.ac.jp/SAT/>

筆者メールアドレス

a_kitamura07@yahoo.co.jp